



Title	1970年代の京都における音楽実践の場所の歴史を描く : "Coffee House 拾得" ・ ' '磔磔" ・ "サーカス& サーカス' 'を事例に
Author(s)	村尾, 尚哉
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2024, 9, p. 51-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1970年代の京都における音楽実践の場所の歴史を描く
— “Coffee House 拾得”・“磔磔”・“サーカス&サーカス”を事例に—

音楽学 博士前期課程1年
村尾 尚哉

はじめに

本発表では、1970年代の京都に創設された3つの音楽実践の場所、“Coffee House 拾得”¹、“磔磔”、“サーカス&サーカス”の70年代における諸相を取り上げ、音楽史にそれらを跡付けることと、音楽に関わる人々の語りに耳を傾け、音楽史を開かれたものにするを目的とした研究について簡略に紹介していく。

それらを通して、今日、日本の音楽文化におけるインフラストラクチャーの一形態となった、ライブハウスと呼ばれる音楽実践の場所の最初期の事例が、どのような背景のもと創設されたのか、そこでどのような人々やものが去来していたのかを明らかにすることに加え、音楽史に様々な人々を参入させることを目指す。ただし、今回の発表では、紙幅や発表時間に鑑み、特に扱う事例についてはごく簡単な説明にとどめている点に留意されたい。

1, 関連する研究への批判的考察

本節では、「ライブハウス」という和製英語の言葉があてがわれる音楽実践の場所²を扱った研究を検討し、そういった場の歴史を調査する意義を示す。

関連する研究としては、同時代におけるライブハウスの社会的意味合いを検討したもの[宮入, 2008]や、そこに生まれるコミュニティや創造性の意義を説いたもの[生井, 2022]がみつかると、これらの研究は「ライブハウス」という言葉がある程度広まった時代においてそれを分析することに主眼が置かれており、そのような場の歴史記述はあまり取り組まれていない。そういった取り組みとしては、特に東京で経営されている、経済的に成功したベニューの、一部の当事者によるもの[平野, 2020など]がみつかると、これらも、経営者の一部や演奏者を主軸にした歴史記述であること、東京以外の地域はあまり扱われないことなど、課題が残されている。

一方で、生演奏が行われる場所を歴史として扱う動きが、英語を共通言語とする研究範囲で盛り上がりを見せてきているが[Frith et al, 2013, Jian, 2016]、日本の事例

¹ 以下、“拾得”と基本的に表記。

² 1970年代中盤から使用例がみつかると「ライブハウス」という言葉は、本研究で取り扱う時期の一部(1970年代前半)には存在しなかったものと考えられるため、「音楽実践の場所」という、ゆるやかに音楽の演奏をはじめとする実践が行われる場所を指す言葉を使い、もう少し店としてのニュアンスを含みたいときは「音楽ベニュー」などの言葉を用いたい。

については、上記のライブハウスへの研究の中で若干触れられはするが、未開拓である。

本研究では、上記の動向を踏まえながら、70年代の京都に創設された音楽ベニユーの歴史記述を通し、従来の音楽史が取り組んでこなかった範囲を衝くことを目指す。

2, “拾得”・“磔磔”・“サーカス&サーカス”

本節では、1970年代における音楽の実演が行われる場の中でも、ある程度の影響力を持った事例であることが推察される3つの音楽ベニユーを紹介していく。上記3つの場所には、70年代中盤頃から使われ始めた「ライブハウス」という言葉が、早い段階であてがわれており、それらのあゆみを音楽史に跡付けることで1970年代の京都にどのような音楽に関わる人やものが去来したのかが、ある程度明らかにできると考えられる。本研究は、それらの共通点や違いを吟味しながら、1970年代の京都における音楽実践の場所の諸相をさらに充実させることを目指す。

“Coffee House 拾得”は、1973年2月18日に京都市上京区に開店し、2024年現在も営業を続けている飲食店かつ音楽ベニユー³である。拙稿[村尾, 2024]では、創業者のライブ・ヒストリーや当時の記述を通して、“拾得”がどういった背景で創設されたのか、開店当初にどのような人やものが去来したのかを明らかにし、同時代における音楽関係者をはじめとする人々が去来するハブとしての機能や、“拾得”が開店当初から現在に至るまであくまで飲食店としての営業を軸に置いており⁴ライブハウスとカテゴリーされるのを前提にしていない場所であることを指摘した。ただし、この論文は扱う範囲を同店の創業当初の時期にとどめており、同時期に現れ始めた他のベニユーとの関係まではあまり踏み込めておらず、いまだ調査の少ない同時代の京都の音楽実践の場所の歴史をさらに肌理細かなものにするには、さらなる調査が必要となろう。

“磔磔”は、1974年に京都市下京区に開店し、2024年現在も営業を続けている飲食店かつ音楽ベニユーである。その開店を伝える記事⁵からは、レコードがきける喫茶店として認められていたことが見出せる。ライブ・イベントを積極的に行いはじめたのは1975年から⁶、という旨が“磔磔”のホームページに書かれている通り、同店でのライブ・イベントを周知する記事は開店の翌年からみつきり、それらからは、当時関西を拠点にしていた人々をはじめ様々なミュージシャンが演奏していたことや、寄席が開かれていたことが読み取れる。75年からのイベント・スケジュールがホームページに掲載されており、出演者に関してはある程度様子を推測できるが、それ以外の人々に

³ 1970年代中盤から使用例がみつける「ライブハウス」という言葉で、“開店当時の拾得”と“磔磔”はさし示されていないことに鑑み、「音楽実践の場所」というあえて広い範囲を表すことができる言葉をここでは用いる。

⁴ もっとも、今日「ライブハウス」と呼ばれる類の音楽実践の場所は、大体が飲食店として店の営業認可を得ているのだが、簡単なドリンクの提供にとどめている店が多い[宮入, 2008]。それに対し、“拾得”は玄米定食や自家製パンのサンドイッチなど、フードのメニューが充実している点の特徴と言える。

⁵ 開店した月は、「プレイガイド・ジャーナル 1974年10月号」(昭和49年10月5日発行。以下で銅雑誌を指す際は「ブガジャ」と略し、雑誌全体を指すときは『ブガジャ』と表記する)にその旨を伝える記事が見つかる(p.53)ため、9~10月ごろと考えられるが、定かではない。

⁶ “磔磔”のホームページ[<http://www.geisya.or.jp/%7etakutaku/sche.html>, 2024年2月1日最終閲覧]。

については情報があまりみつからず、さらなる調査が求められている。

“サーカス&サーカス”は、1975年に京都市左京区に開店したライブハウス⁷である。開店を知らせる記事⁸には、上記の2店と違い、明確に「ライブハウス」という言葉が使われており、具体的な演奏者(憂歌団をはじめブルースの演奏で知られる演者が多い)についても記述があることから、生演奏がきける店としての営業方針を前面に打ち出していたであろうことも推察される。まとまった調査はされておらず、当時の資料の確認や実際に店に関わった人々へのききとり調査が必要な状況となっている。

以上、本研究で扱う3つのベニューの最初期の様相をごく簡単に確認した。これらのうち、“拾得”の開店当初の様子については拙稿[村尾, 2024]で検討を行ったが、他2店についても詳細を明らかにしつつ、それらの共通点や違いを吟味し、1970年代の京都における音楽実践の場所の諸相をさらに充実させることが求められている。

3, 音楽史の再考へ

本節では、この研究のもうひとつの狙いである、音楽史に様々な人を巻き込み、その可能性を再考することについて論じていきたい。

従来の音楽史記述が、楽譜や録音物を軸に論じられることが多かった[輪島, 2015]のに対し、本研究は、音楽が実践される場所を通して歴史記述を試み、1970年代の京都における音楽史を描くと同時に、採譜や録音などを前提にしていない、音楽的行為への参与やそれが行われる空間も含めて音楽の歴史を考え、音楽史をラディカルに問い直す。そこでは、本稿でも多分に依拠した『プガジャ』などのローカルな資料や、インタビュー調査による情報が必須となる。

特に人々の話を集めることの重要性を強調したい。第1節でも触れた様に、ライブハウスと呼ばれる類の音楽実践の場所の歴史記述は、一部の当事者に任されてきたきらいがあるが、このことからわかる通り、記録を前提としていない音(楽)は、原理的にそれを体験した人にしか感じられず、当事者の発言からしか遡ることができない。

ここで、歴史学/文化人類学者の保苅実が提唱した、「歴史実践」という考え方を導入したい。歴史実践について保苅は、例えば、歴史的名勝への旅行や歴史を扱うドラマの視聴など、「歴史学者におよそ限定された活動である歴史研究や、学校の授業などよりもはるかに多様な、人々が歴史に触れる広範な諸行為」[保苅, 2018, p. 55]とゆるやかな定義をしており、ここには歴史を開かれたものにしていく狙いがある。

そのような観点を音楽研究に持ち込むことで、音楽史を開かれたものにし、記録を前提としていない音をそこに参入させることができるだろう。

⁷ 開店した月は、「プガジャ 1975年5月号」(昭和49年10月5日発行)にその旨を伝える記事が見つかるため、9~10月ごろと考えられるが、定かではない。閉店時期も定かではないが、80年代前半とみられ、その後同所は、“CBGB”という別のライブハウスが2000年代初期まで経営されたのち、2013年7月からは劇団「地点」の稽古場かつ劇場、“アンダースロー”になっている。

⁸ [「プガジャ 1975年5月号」, p. 60]。

おわりに

本発表では、3つの音楽ベニューの1970年代のあゆみの一部を紹介し、同時代の京都の音楽史の一端を示しながら、音楽史に多くの人々を招き入れる重要性を説いた。文献資料に音楽実践の場所についての記録が見つかることもあるが、そういった情報は決して多くはない。それを補うためにも居合わせた人々の発言を頼りにすることになるが、それらを集めるのには、研究者による調査だけでは限界がある。音楽と関わる数多くの人々の語りを、それぞれの歴史実践として誠実に取り扱うことが、「全体としての音楽史」と「認識されたものとしての音楽史」の距離を縮めることにつながるだろう。点在する記録を探し出すのはもちろん、同時代に生きた人々へのききとり調査を積み重ねていきながら、対話を繰り返していくことを、今後の課題としたい。

参考資料一覧

・書籍資料

- 生井達也, 2022, 『ライブハウスの人類学 音楽を介して「生きられる場」を築くこと』, 晃洋書房
- 平野悠, 2020, 『定本 ライブハウス「ロフト」青春記』, ロフトブックス
- 保莉実, 2018, 『ラディカル・オーラル・ヒストリー—オーストラリア原住民アボリジニの歴史実践』, 岩波書店
- 宮入恭平, 2008, 『ライブハウス文化論』, 青弓社
- 村尾尚哉, 2024, 「音楽実践の場の歴史を描く—“Coffee House 拾得”の成立過程を通して」, 『阪大音楽学報第20号』, 大阪大学文学部・人文学研究科音楽学研究室(※2024年3月出版予定)
- 輪島裕介, 2015, 「10 音楽史の可能性」, 佐藤卓己(編), 『岩波講座 現代 第5巻 歴史のゆらぎと再編』, 岩波書店
- Jian, Miaoju. 2016, “8b The legendary live venues and the changing music scenes in Taipei and Beijing: Underworld and D22”, in Koichi Iwabuchi /Eva Tsai/Chris Berry(ed.), *Routledge Handbook of East Asian Popular Culture*, Routledge, pp.124-134
- Frith, Simon. Brennan, Matt. Webster, Emma. 2013, *The History of Live Music in Britain, Volume I: 1950-1967: From Dance Hall to the 100 Club*, Routledge

・雑誌資料

- 『プレイガイド・ジャーナル』, 1974年10月号/1975年1月号/1975年5月号, プレイガイドジャーナル社